

## ミスジャパンの佐賀県職員

### 吉田 愛さん



よしだ・あい 2021年4月佐賀県庁入庁。県立図書館勤務を経て、23年4月に佐賀県保健福祉事務所に転職。ミスジャパン決勝戦では、特技の書道で自身の筆遣いで披露した。佐賀市出身。25歳。

## フォーカス

## 異色の「二足のわらじ」で魅力発信

働き方が多様化するなか、前例のないデジタルキャリアに挑む。最後の佐賀県庁職員でありながら「Miss Japan Miss Japan」のグランプリに輝いた吉田愛さんは、「自分にしかできないやり方で、佐賀県の魅力を発信していきたい」と話す。

職場は、県の保健福祉事務所だ。小児慢性疾患の医療助成事業などの受付業務や事務を担当している。上司の吉富紋子係長

は吉田さんの仕事ぶりを「電話での問い合わせや窓口での申請業務にも、ひとつひとつ丁寧に対応している」と評価する。柔らかな笑顔がトレードマークで、「怒っているとこを見たことがない」（吉富さん）という。

自身を「器用ではなく、地道に努力するタイプ」と話す。実は、子どものころから二つの夢があった。ひとつは県庁の職員

になって生まれ育った佐賀県の魅力を全国に発信すること。もうひとつが「人々に元気や勇気を与えるアイドルになること」。

2つの夢に向かって、学生時代には公務員試験に向けて法律を学ぶ傍ら、モデルなどの芸能活動も始めていた。

だが県職員として仕事に没頭するなかで、少しずつ息苦しさを感じるようになったと振り返る。仕事にやりがいがあったが「自分らしく自由に表現できていないことに、もどかしさがあった」。

ミスジャパンへの応募を決めたのは、月下旬のことだった。友人に勧められたものの「公務員の自分が応募しても大丈夫だろうか」と迷っていた。ギリギリまで考え抜き「新しい時代の可能性を切り開いてみたい」と

諦め切り直前にエントリーした。

選考が進む中で上司らに応募したことを報告。9月の最終選考会前に山口洋親知事を訪ねて、自身がめざすデジタルキャリアに「お墨付き」をもらった。

今後1年間、平日は県職員として働き、週末や休日はミスジャパンとしてチャリティー活動などに参加する。「好きなことをしているのが忙しくてもストレスはない。職場でも以前より生き生きとしているはず」と笑う。

職場でも吉田さんの「二足のわらじ」効果に期待が高まる。山口知事は「県庁職員が多彩であることは誇らしい。ミスジャパンの活動を任事に還元し、生かしてほしい」とエールを送る。（佐賀支局長 長谷川聖子）